

氏名	此島 由紀 (このしま ゆき)
学位の種類	博士(看護学)
学位授与番号	甲 第 20 号
学位授与年月日	令和 3 年 3 月 3 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
学位論文題名	祖父母が重症心身障がいの子の孫の育児に参画するプロセスに関する研究 (A Study on the Processes through which the Grandparents of a Child with Severe Motor and Intellectual Disabilities (SMID) may become Involved in Raising the Child)
論文審査委員	(主) 教授 真継 和子 教授 竹村 淳子 准教授 瓜崎 貴雄

学位論文内容の要旨

〈緒言〉

日本において、気管切開や胃瘻等の医療的ケアを必要としながら在宅で生活する重症心身障がい児（以下 重症児）は増加している。そのなかで、在宅で療養する重症児や家族に向けた支援体制が整備されてきている。しかし、重症児の場合、医療的ケア等もあるため 24 時間通して介護が必要となり、主な介護者である母親の育児や家事のバランスを維持していく必要がある。母親の育児や家事のバランスを維持していく上で、公的な支援体制を活用していただくだけでは困難であるといえる。母親の子育てがうまく維持できるように、インフォーマルな支援として家族のサポートは重要である。その中でも、祖父母が子育てに何らかの参画をすることが、母親の子育て支援につながると考える。祖父母の障がいのある孫への育児において、障害の理解が関連していることや母親への関わりについては明らかにされており、実際に障がいのある孫と接するなかで、何らかの孫の育児に全く参画していないとは考えにくい。しかし、祖父母の視点から重症心身障がいをもつ孫の育児への参画を明らかにしたものは見当たらない。祖父母が重症心身障がいの子の孫の育児に参画するプロセスを明らかにすることは、重症心身障害児とその家族の看護に携わる看護職に対して、孫の育児に参画する祖父母への支援の対する視点を提案することにつながると考えた。

〈目的〉

本研究は、在宅療養している重症心身障がいのある孫をもつ祖父母が、孫の障がいをどのように理解し、孫育児に参画しているかのプロセスを明らかにすることを目的とした。第一部では、重症児を養育する家族を対象とした研究より重症児とその家族の中での祖父母の機能を明らかにすることを目的とした。第二部では、祖父母が重症児である孫の育児に参画するプロセスと特徴について明らかにすることを目的とした。

〈方法〉

第一部では、国内外の 15 文献を対象に文献レビューを行った。

第二部では、15 歳以下の重症児を孫にもつ 75 歳以下の祖父母 13 名を対象に半構造化面接を行い、M-GTA (修正版グラウンデッド・セオリーアプローチ) を用いて分析を行った。

〈結果・考察〉

第一部では、障がい児とその家族の中における祖父母の機能は、【母親への影響】、【母親に対する支援】、【重症児でなくきょうだいに対する育児支援】、【きょうだいの要望としての育児・家事代替者】の 4 つの機能に分類された。祖父母の存在は母親や家族全体に影響を与える鍵となり、母親への支援者として機能している姿が明らかとなった。これにより、祖父母は障がいのある孫の育児に対して何らかの参画をしていると考えられるが、祖父母の視点から詳細を明らかにした研究は見当たらなかった。

第二部では、重症児の孫をもつ祖父母の孫育ての参画のプロセスは、11 カテゴリーが生成され、孫と子ども家族に対して積極的な参画と見守り型の参画の 2 つのタイプ示された。いずれのタイプも、孫の出生当初は、孫の【状態がわからない不安による思考停止】となっていた。積極的な参画のタイプは、その後、【まずは母親を助けたい】思いから、【孫の顔のみをみただけでうれしい】という気持ちが芽生え、【子ども家族を背後から支援する】という関わりに変化した。その関わりから、孫に対して【踏み込んだ世話をしたくてその方法を模索する】ようになった。しかし、医療的ケアを必要とする孫をみるたび【成長とともに不安が募る】こともあった。孫と直接触れ合う機会が増えると【反応がない孫と心が通じる】ようになり、やがて【孫の存在が生きる励みとなる】までになった。一方、見守り型の参画のタイプは、子ども家族が何とか生活している様子を見て【頼ろうとしない子ども家族に孫のことは任せる】ことにした。孫と会う時は、【手を出さず側でみている】状態であるが、内心では【成長とともに不安が募る】気持ちがあった。このような祖父母は、【子ども家族が求める距離をとる】ことで孫と子ども家族を見守る形の育児への参画をしていた。

これらの結果より、祖父母の孫の育児の参画のプロセスの特徴として、祖父母が娘を助けたい思いや子ども夫婦が祖父母の援助を求めるか、または、祖父母に頼ろうとしない姿勢を見せるかで孫の育児への参画が異なると考えられた。また、祖父母が孫の世

話の仕方を模索する経験は、手を出せずにいた孫とのかかわりを見出すターニングポイントとなり、世話に習熟した子ども夫婦から育児方法を教わるという特徴があった。

重症児の孫と祖父母との関係性の確立は、孫 - 子ども夫婦 - 祖父母の3者関係の難しさに加え、医療的ケア等特殊な育児を要する孫との関係となるため、関係性の確立に時間を要したと考える。

第三部では、第2部の結果をふまえ、看護実践活用に向け、重症児看護に携わる看護職へ以下の事を提案した。

1. 重症児の育児支援者として安易に祖父母を位置付けるのではなく、祖父母と子ども家族のニーズを把握すること。2. 孫とのかかわりによって世話の仕方に興味を示す様子があれば、実際の育児行動に誘ってみる。3. 祖父母が孫の育児行動を行う際は比較的難易度の低いケアから始め、成功体験を積み上げる。

本研究において、重症児である孫に対する祖父母の育児参画には少なくとも2つのタイプがあった。そのため、今後は他のタイプの有無や祖父母の年齢、性別、娘方・息子方、同居の有無による相違について検証が必要である。また、看護実践の活用の洗練が必要である。

《結論》

重症児の孫をもつ祖父母の孫育児の参画のプロセスは、積極的な参画のタイプと見守り型の参画の2つのタイプが示された。いずれのタイプのプロセスも、孫の出生直後、状態がわからないことによる不安や思考が止まることから始まることは共通していた。積極的な参画のタイプでは、祖父母が孫の世話を模索することが、孫への積極的な世話に向かうターニングポイントとなった。祖父母と重症児である孫との関係は、世話の難しさと子ども夫婦の意向を汲む必要性から関係構築に時間がかかると考えられた。

論文審査結果の要旨

本研究は、わが国において増加傾向にある重症心身障がい児の家族支援の充実が求められるなか、これまで論じられることがなかった重症心身障がい児と祖父母との関係に焦点をあて、孫の育児への祖父母の参画プロセスとその特徴を明らかにすることを目的に、3部で構成されている。

第一部は、国内外15文献から重症心身障がい児の祖父母の機能について文献レビューを行った。その結果、祖父母の機能として、【母親への影響】【母親に対する支援】【重症児でなくきょうだいに対する育児支援】【きょうだいの要望としての育児・家事支援者】の4つの機能があることが示され、祖父母の関与が家族生活全体に影響すると考えられた。

第二部では、祖父母が重症心身障がいをもつ孫の育児に参画するプロセスについて明らかにした。15歳以下の重症心身障がい児を孫にもつ75歳以下の祖父母13名に半構造化面接を行い、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いて分析し、11カテゴリを生成、2つのタイプを提示した。【状態が分からない不安による思考停止】を起点とし、積極的参画タイプは、【まずは母親を助けたい】【子ども家族を背後から支援する】【踏み込んだ世話をしたくてその方法を模索する】【成長とともに不安が募る】【反応がない孫と心が通じる】【孫の存在が生きる励みとなる】、見守り参画タイプは、【頼ろうとしない子ども家族に孫のことは任せる】【手を出さず側でみている】【成長とともに不安が募る】【子ども家族が求める距離をとる】で構成された。子ども家族が祖父母の援助を必要とするか否かによりタイプは異なり、祖父母は子ども家族のニーズと意向をみながら、孫の育児への参画の仕方を模索していることを明らかにした。

第三部では、第二部の結果から看護実践への活用に向け、祖父母の孫育児の参画の特徴を理解すること、祖父母が世話の獲得に興味を示すタイミングでの支援の必要性、孫育児の参画に対し、医療的ケアを含む慣れない世話に対する祖父母の成功体験を積みあげる必要性を提起した。

本研究の新規性は、障がい児の祖父母に焦点をあて、孫の育児への参画プロセスを丁寧に読み解き2つの異なるタイプの参画の仕方を提示した点であり、今後の看護実践への適用の検討が期待され、重症心身障がい児をもつ家族支援の発展に大きく寄与しうるものである。

以上により、本論文は本学大学院学則第11条第2項に定めるところの博士（看護学）の学位授与するに値するものと認める。

(主論文公表誌)

Open journal of nursing,10.1251-1264,2020